

エドワード・サイード「パレスチナへ帰る」(作品社)

ジャン・ジュネ「恋する虜」(人文書院)

マーク・トウェイン「イノセント・アブロード(上・下)」(文化書房博文社)

ギュスターヴ・フロベール「フロベールのエジプト」(法政大学出版局)

アラブと政治

文・選 山本薫

Text & Select by Kaoru Yamamoto

他者か、隣人か、友人か。摩擦と発見のアラブ世界に、政治視点で旅をする。

かつてイスラム文明から科学技術と古代ギリシアの叡智を学んだ西洋は、産業革命を実現して近代を迎えると、オリエン트에むき出しの欲望を向けるようになる。「ボヴァリー夫人」を著す以前のフロベールは、1849年から一年半もかけて中近東を大旅行した。そのうちのエジプト横断の記録である「フロベールのエジプト」からは、いかに彼の欲望が、古代遺跡の見学と同程度に、女性を漁ることに向けられていたかがわかる。彼は驚嘆すべき情熱と精力を、現地の知的搾取と性的搾取とに傾けたのだ。

オリエン트에精通した旧世界の人間に比べると、それから約20年の後にパレスチナを目指した「イノセント・アブロード」のマーク・トウェイン一行の旅は、いかにもイノセント(無知・無邪気)に映る。この新世界からやって来た団体旅行客は恐るべきイノセントさ(書名の「イノセント」にはおのぼりさんという意味も込められているという)を隠そうとせず、各地で騒動を巻き起こし、聖書に描かれた夢の地の現実の姿に悪態をつく。

そのアメリカが抱える黒人差別という暗闇から抜け出す道を求めて短い生涯を駆け抜けたマルコムXは、聖地メッカへの巡礼旅行で、世界中から集まったあらゆる肌の色と階級の人々が、兄弟愛で結ばれる様を体験した。中東・アフリカへの旅は「イスラムこそが社会から人種差別をなくす唯一の宗教だ」との確信を彼に与えたのだ。

マルコムXの暗殺後に登場した黒人解放運動、ブラックパンサー党と、パレスチナのフェダイー(解放戦士)たち。ジャン・ジュネの晩年はこの両者への「肉感的な連帯」に捧げられた。彼らと共に過ごした1970年代前半の日々を回想した「恋する虜」は、パレスチナ革命の稀有な記録であると同時に、遺棄された者の側に常に身を置かざるを得ないという、人間ジャン・ジュネの肖像でもある。

「パレスチナへ帰る」はいわゆる旅行記ではないが、パレスチナ出身の亡命者サイードが、「アメリカ人旅行者」としておよそ半世紀ぶりに一時の帰郷を許されるという皮肉な状況に、この地が抱える困難さが透けて見える。

World Traveler

マルコムX「完訳 マルコムX自伝(上・下)」(中公文庫)

祥伝社黄金文庫